

保育の「ほらおっけー」から見えるもの

— その二 —

生沼 晴美

昨年度末、私はある研究会で、三年前のビデオ記録を観ながら、保育者の援助の方法や子どもの育ちについて、考え合う機会を得た。そのビデオは、自園での園内研修が始められた年（九十七年度）に私ともう一人の保育者として担任していた三歳児の様子、主に木馬をめぐる男児たちのやり取りや、その周辺で気になる子どもにかかわる私の姿を記録したものである。私にとって、その消し去ることの出来

ないビデオ記録は、当時の園内研修で私が抱えていた保育の課題をそのまま映し出すものであり、出来ることならば、もう二度と観たくないと思うものだった。もう触れて欲しくない、隠したいと思うような自分の姿を再びさらけ出すことは、苦痛でしかないと思っていた。

しかし、三年ぶりに映し出される子どもたちの遊びの様子と自分の姿は懐かしく、また新鮮な発見を

与えてくれるものであった。当時は撮影される当事者として主観的な見方をし、苦痛と感じていた事柄を、三年を経た今は、客観的な見方によって意味深い事柄として受け入れられるようになっていた。

当時と現在とで同じビデオ記録をもとに話し合う機会を得て振り返ってみると、この三年の間に、保育者として、保育を省察する視点や感じ方が変化したとするならば、どのような要因によってそれが起こったのだろうか、また、その変化が保育者の成長につながると言えるのだろうかという問いが起る。ここで、ビデオ記録の概要や当時の園内研修や研究会における記録、当時の日誌などを整理しながら、それを探ってみようと思う。

ビデオの概要

・撮影されたのは、九十七年度三学期（九十八年一月末）。主な登場人物は三歳児のU男、K男、Y

子、Y男とY男にかかわる私。

・当日までの様子を簡単に記すと、U男とK男は、入園当初から同じ仲間です。汽車を使って遊ぶことが多く、レールを組み立て、その両側にコルクの積み木で駅や家を作ったりすることが続いていた。一月に入ると木馬に乗ることが増える。特にK男は、園内に三つしかない木馬を使うために、登園時間を早くしていた。一月二十三日の保育記録にはK男が乗っている木馬をU男が引きたいと言っても、K男がそれを拒否したことからU男がK男を叩き、二人とも泣いたこと、年長児が二人のけんかの仲裁をして、交代で引くことになったが、すぐに止めてしまったこと、またその出来事から、「K男は木馬に執着」と書かれている。Y男は体調を崩して長く休むことが多く、一人でいることが多かった。また、周囲の子どもがしていることに関心があり、かかわろうとするのだが、「○○君はもう△△君と遊んでるから

（入れない）」とつぶやき、積極的に他者にかかわるほうではなかった。

・当日のビデオの流れは、以下のようなものである。

次々に登園して遊び始めている子ども、保育者や友だちと言葉を交わす子どもたちがいる保育室へ、木馬に乗ったK男が登場する。そこに、登園してきたU男「遅くなっちゃって…。（木馬を）取っておいでくれたのか」K男「一番早く来たから。誰もいない時に…」という会話。U男の仕度が済み、二人でホール（遊戯室：年少の保育室とホールは扉を挟んでつながっている）に出かける。ホールでは、K男が木馬を引き、U男がお客になつて待ったり、乗ったりしている。その後登園してきたY男は、絵本を持ってホールの奥にある図書コーナーへ向かうと、そこに止まっていた、U男が引く木馬に乗る。が、すぐに降りてしまう。後からY男のところに行

真っ直ぐに行く私（Y男が木馬に乗ったことは全く知らない）。木馬で遊ぶ二人は、電車やバス、タクシーなどのイメージを言葉や仕草で表しながらホールを何周も周る。途中でY男と私のいる図書コーナーに立ち寄り、運転手の交代をする。二人はホールを出て廊下を通り、年中や年長の保育室を見て歩く。Y子は、朝から木馬を探していたのだが、この頃やっと手に入れて、U男とK男の遊びに参加。木馬が二台になり、二人から三人になったことで、Y子がU男を誘って自分の木馬に乗せたり、運転手のK男が乗車拒否をするなど、U男、K男の関係に変化が表れる。その間、ずっと場所を変えず、図書コーナーで絵本を見るY男と私。U男やK男、Y子はしばしば私たちのところへやって来るが、私はその都度短く言葉を交わして対応している。

この日、私が最も気にしていたのがY男である。

一緒に遊ぶ人を求めていながら、なかなか関係を持つことが出来ず、不安げなY男とともに過ごすことが大切だと思っていたので、とにかくY男の傍に行こうという気持ちだった。U男とK男が木馬で遊んでいるのは分かっていたが、「タクシーごっこで一緒に仲良く遊んでいるな」という単純な見方をし、Y男が満足するまで一緒に過ごそうとしていた。周囲の子どもの遊びの様子も把握しておらず、Y男以外の子どもたちがその時どこにいて、どんなことをして遊んでいたのかなどはほとんど把握していない。それに加えて、私はY男とじっくりかかわっているのだから、他の子どもたちのことは複数担任のA先生が見てくれるのだらうとも思っていた。

当時の園内研修では、木馬をめぐる子どもたちのやり取りの面白さなども話題に上ったのだが、Y男と私のかかわりが話し合いの大きなテーマとなった。他の保育者からは、Y男にかかわるだけでな

く、視野をもっと広げる必要性があることや、Y男にたいしても、違ったかかわり方があるのではないかと、Y男にとって私の存在にどんな意味があるのか、二人だけの閉じられた世界が出来てしまうのはどうなのだろうか：などという問いかけがあった。しかし、私は、一人でいるY男に、一対一でじっくりとかかわることが、「保育者の援助」だと思っていた。そして、他の保育者の問いかけの意味が理解できず、困惑するだけだった。さらには、私は間違ったことをして、他に正しいことがあるのに、私にはそれが分からないと批判されているのだという思いも抱いていた。とにかく、子どもの成長



や子どもの遊びについての省察をするというよりは、私自身が他の先生からどう見られているか、私の欠点がさらけ出されるのではないのかということばかりが気になり、ビデオの中の自分の姿を追ってばかりいたのではないかと思う。

そのような苦い思い出を蘇らせながら、三年振り
にビデオを観てみる。まず、木馬をめぐるやり取り
の中で、U男やK男が自分の欲求や要求を実現する
ために自己主張をしながら、遊びを継続させるため
にお互いに葛藤し、妥協している様子がけなげで、
会話の豊富さに改めて驚かされた。遊びながら実に
多くの交渉を行い、木馬に乗って動きながら、周囲
の様子もよく把握しているのである。また、私がY
男と長い間絵本を見続ける間に、保育室とホールで
遊んでいる子どもたちの、それぞれの遊びに必要な
援助をしようと動き回っているA先生と、自分との
違いがはっきりと見えてきた。ビデオを繰り返しよ

く観ていると、図書コーナーに行った時、Y男は少
しの間U男の引く木馬にまたがっていたことが分
かった。その発見をするまで、私はこの日のU男た
ちの遊びとY男の接点は全く無いと思っていたのだ
が、子どもたちは私の見ていないところで、多くの
接点を持っているのではないかと思われた。この
ような、ビデオを観る視点が自分から子ども同士、
他の保育者に移ったことにより、私は、当時の園内
研修で問いかけられていたことの意味と、自分の持
つ保育観を理解するようになったのである。

三歳児の生活では、保育者とのかわりによって
一人ひとりが安心して過ごすことが中心で、場を同
じくするといってもそれぞれが自分のやり方で遊び
を充実させることが大切、他者とのつながりはまだ
まだ薄いと思ひ込んでいた私は、気になる子どもに
一対一でかかわることが最大の援助だと思ってい
た。不安を抱えた子どもの傍に寄り添い、実際にと

もにすることが適切な方法だと思ひ、ずっと長い時間、その子が満足するまで一緒に遊ぶべきだと考えていた。それがすべて否定されるものではないと思うが、私の場合は一人の子どもを集団から切り離して二人だけの世界を作り上げていたのではないかと思ふようになった。私自身も、集団を構成する多くの子どもたちがいることを配慮せずに一対一の関係を守ろうとしていたのではないか。そのため、一人の子どもと私の関係は濃くなるが、子ども同士がかかり合いながらお互いがつながり、成長し合う機会を奪っていたのではないか。さらに、出来る限りの、子どもを理解しようとする努力をしてはいたものの、子ども理解をした上での、具体的な援助の方法がかみ合っていないことがはつきりと見えてきたのである。Y男の場合、Y男自身は他者に非常に関心を寄せており、一緒に遊びたいとは思ひながら、積極的にかかわることが出来ずにいたのだけ

ら、私はY男と他の子どもをつなげるパイプ役になるべきであったのに、実際にはY男を集団から孤立させ、ますます関係をつけにくくしていたのだ。

園内研修での問いかけは、このような、子どもとの閉じられた関係を作りがちな私へ保育の姿勢、子どもを観を問うものだったのではないか。保育者自身を評価、批判するものではなく、一人の子どもを成長を助ける保育者集団の仲間として、共に考え合ひ、向上しようとする建設的な話し合いだったのでないか。そう理解すると、共に保育をする仲間への強い信頼感を覚えると同時に、私の持つ保育観が変化していくのを感じた。そして、U男やK男の姿から、三歳児といえども、多くの葛藤を乗り越えながら他者とかかわり、遊びを充実させ、その中で知識を蓄えながらより良い人間関係を築こうとしていることが、私の子ども観を変化させることになったように思う。

このような気づきと変化が生まれたのは、前回も述べたように、園内研修において、その都度立ち表れてくる保育の課題に対しての他者の保育観に触れたり、年長・年中の担任として日々の実践を重ねる中で、子どもとともに保育を作り出していくことの大切さを経験したこと等があげられる。それに加えて、この場合は、三年の年月を経たビデオ記録を題材にして話し合うということから、何度も何度も同じ場面を見直し、自分の持つ保育観や子ども観などについて、他者との対話を繰り返したことが大きな要因ではないかと思われる。

また、保育記録を「ほりおこし」て振り返ることによって、入園からの様子、日々の保育の積み重ねの経緯などを踏まえて、長い目で見た子どもの成長の過程としてビデオ記録の一場面を見ることができたことも一つの要因としてあげられよう。ビデオ記録というものは、保育の在りようをその当時のまま

に映し出す。しかし、その当時自分はどうな思いを持って子どもたちを見つめていたのか、どんな援助をしようとしていたのか、というような心の動きは見えづらい。そのため、当時の遊びの見方や感じ方などを振り返る必要から、保育記録を引っ張り出してみる。当時の園内研修のさなかには、思いをはせる余裕のなかった子どもたちの成長の過程を追ってみると、Y男への私の思いとかかわりや木馬が子どもたちにとってどのような存在だったのか、また、一緒に遊ぶことの多かったU男やK男と、Y男とのかかわりの様子などが浮き彫りにされる。保育記録は、子どもの成長の記録であるとともに、保育者の実践と成長の記録でもあると言える。自分の持つ保育観、子ども観、また具体的にど



んなことを考えて保育行動を起こし、どのように感じたかなどを振り返ってみると、自分自身の変化に気づくことが出来るのではないか。その変化は、良くなった、悪くなったという評価では捉えられない。しかし、様々な視点で保育を見直すために「ほりおこし」ていく価値があるのではないかと思う。

園内研修等を通して、自分の保育観や子ども観が変化する時、時に、それには（心の）痛みが伴うこともあり、自己存在が揺るがされると感じることもあるかもしれない。私自身は、保育というものの全体像が全く分からず、自分の保育実践を深く省察することが出来ない頃に、ビデオ記録によって自分の姿を突きつけられ、その痛みを味わうことになった。しかし、その経験があったからこそ、ゆつくりとした歩みではあるが、少しずつ、日常の保育の中で気づきが与えられ、また新たな日々をよりよく過

ごすための示唆を与えられていると思う。一つの事柄に対して、様々な視点から考察を加えていくことは、保育という全体像を捉える上で、非常に大切なことである。保育者として、子どもの育ちにしろ、保育のあり方にしろ、一つの見方でしか見えなかったものを違った角度から見られるようになるということは、確かに成長の表れであると思う。省察の仕方にも様々なものがあるう。時に立ち止まって自分に問いかけながら、また、他の保育者の問いかけに耳を傾けながら省察を繰り返し、保育者としての成長を考えていきたいと思う。

（青山学院幼稚園）